

# 日本語における南島語的要素

福田 益和

## (一)

日本語のルーツを探究する試みは未知なるものを求めるというロマンに溢れているせいも、古くから諸家によって研究がなされている。が、その割には客観的に眺めて、実りが多いとは言えないように思われる。それには種々の理由があるだろうが、言語研究の難しさ、中で、言語の溯源研究の難しさがあげられると思う。溯源研究では資料の壁が前に大きく立ちちはだかる。たとえ若干の資料が残されていたとしても、所詮ナマの資料（音声言語資料そのもの）ではない。その残されたごくわずかの資料等をもとに言語学的視座からの照射を経ていくつかの事実をつかみ、当時の言語の姿を復元しようとしても、常に不安がつきまとい離れないものである。

言語の系統を問題にする時、方法として比較言語学が導入されるのが一般である。ドイツに誕生した比較言語学は、

その方法論の卓抜さによって「印欧語族」という言語家族の概念と内実とを明らかにし、その輝かしい成果は世界の人々を瞠目させた。やがては、この方法によって世界の諸言語のルーツがわかり、それ等の系統関係も明らかとなるであろうという夢が言語学者の心にわきあがったとしても無理はないであろう。しかし、言語の系統の研究はそんなに甘いものではない。「比較言語学」という、言語プロパーの方法論だけではなかなかいい結果が得られないことと、現今では学際的な研究の必要性も自覚されはじめた。すなわち、多面的な立場から言語に迫り、それ等の成果をもとに改めて言語自体に立ち返り研究を深めて行くという方法である。

## (二)

日本語の系統論については、これまで、いわゆる「北方説」を主軸として展開されて来た。すなわち、アルタイ系<sup>(注)</sup>

言語との親縁関係が強調されて来た。中で、日本最初のアルタイスト藤岡勝二の「日本語の位置」という講演（於國学院大学）は、人々に大きな影響を与えたといわれる。彼の言語比較の特徴は、類型学的比較の考察が中心をなしたことにある。ただ、言語の類型学的比較は相互の親縁関係を測る上での目安とはなり得ても系統を考える決め手にはならないのである。たとえば、藤岡説で一つの例外とされた、「母音調和」が日本語には認められないということ。

これは当時不審の項目として残されたが、後年（1932）、有坂秀世・池上禎造氏によって古代日本語の母音調和の痕跡が発見され、アルタイスト達にはわかに活気づき日本語系統論の主流となり得たのであった。しかし、その「母音調和」として、アルタイ系諸語にのみ見られる現象ではない。オーストロネシア語族に属するインドネシア語にもみられるし、アイヌ語やアフリカ諸語にも認められるとのことである。とすれば、古代日本語の母音調和の痕跡の事実をもつて、これをアルタイ語族に結びつける決め手にはならないことになる。比較言語学でいう音韻対応の法則も、日本語の場合、印欧語族にみられるような体系性はいまだ証明されてはいない。ただ、ラムステット (G. J. Ramstedt) 等の示唆的な研究が一方にあって日本語とアルタイ系言語との親縁関係は存在しているというのが大方の見方であると

思われる。ラムステットは溯源研究の中でアルタイ祖語を想定し、その母音・子音を復元しようと試みている。彼によれば、

母音: \*a \*i \*o \*u \*ā \*ā̄ \*ī \*ō̄

子音: \*p \*t \*k \*b \*d \*g \*c \*s \*y \*m \*n

比較言語学における音法則の成果を裏あるものにするためには、祖語の姿（中で、音韻）を明らかにすることが大事である。そうした観点より考えると、ラムステットのアルタイ祖語の母音子音の提示は、アルタイ系諸語の比較さらにはその親縁関係の度合を測る仕事の基礎を示してくれたという点で北方説における一つの成果として高く評価されて然るべきである。

### (三)

とはいえ、原始日本語への溯及、ひいては系統関係を論ずる上で今一つ物足りなく思われるのは主流としての北方説への偏向あるいは固執があるのではないだろうか。

われわれは、南方説にもう少し耳をかたむける必要があると思われる。南方説、中で、オーストロネシア語族（南島語族）との親縁関係をもっと追究すべきではないだろうか。

民族学者岡正雄の提唱した、五つの「種族文化複合」の

うち、

母系的・陸稻栽培——狩獵民族文化——オーストロアジア

語系の言語

男性的・年齢階梯制的・水稲栽培——漁撈民族文化——オー

ストロネシア系文化

等は、明らかに南方から渡来した人々の文化を指摘したものである。

『魏志』倭人伝（東夷伝・倭人の条）の記事に見られる、潜水漁撈・文身・貫頭衣等の南方的要素は周知のことであり、記紀神話で有名な海幸・山幸の話はインドネシア等に酷似する話が伝えられていて、オーストロネシア語族のうちヘスペロネシア語派（西部語派）との関係が深いと認められる。海幸すなわち「火闌降命（ほのすそりのみこと）」が隼人等の始祖だとする『日本書記』などの記事は極めて示唆的であり、隼人をインドネシア系種族だとみる説もそこから生じたものである。大和朝廷から異民族視された隼人の出自は南の島にあったものと考えて間違いはあるまい。ところで、オーストロネシア語族のうちヘスペロネシア語派の言語（インドネシア語など）と日本語との比較をしてみると、文法面においてかなりの懸隔があることに気がつく。例えば、語順の問題。インドネシア語の事例で示す。

Saya suka apel.（平叙文型）

S（私は）—V（好きだ）—O（リンゴが）

上記のごとく、英語・中国語等と同じで、日本語などの、S—O—Vの語順とは異なる。また、修飾語・被修飾語の順序も日本語のそれとは逆転する。

Negara besar（大きい国） Orang baik（良い人）

（国）（大きい） （人）（良い）

これ等の文法的事実を前にした時、素朴な印象としては日本語とオーストロネシア語族との関係は否定的なものとして映し出されるのである。上に示した二つの文法的事実は、アルタイ系諸言語においてはいずれも日本語と共通のものであり、それ故にアルタイス達の声が大きくなるのである。日本語の文法的側面を重視した時、その北方的要素が濃厚であることは認められる。ただし、そのことをもって日本語をアルタイ系言語のみに限って系統的に関連ありとするわけには行かないのである。

先の文法的事実は、グリーンバーク（J.H.Greenberg）の語順類型論、レーマン（Lehmann）のVO型言語・OV型言語等と関わる言語類型論の問題としてとりあげられる事項である。繰返しになるが、言語の類型論は系統論の決定因子となることは出来ない。グリーンバークの調査対象となった30言語のうち、日本語と同じS—O—V型の言語の中にはバスク・ヌビア・ケチュアの諸語のように日本語

と同系とは考えにくい言語も含まれているのである。<sup>(註1)</sup> また、日本語とは順序が逆になる、被修飾語——修飾語の、インドネシア語タイプの言語は、バスク・ベルベル・グアラニ等多数に上り、インドネシア語独自のものとは言えないのである。

インドネシア語と日本語とが、いわゆる鏡像関係にあるということがよく指摘されるが、中で、現代インドネシア語の、被修飾語—修飾語の語順については、DMの法則<sup>(註10)</sup> (Hukum DM) として知られている。しかし、文法には例外が付きもの。DMの法則に従わない、MDの語序つまり日本語等と同じ語序をとる場合もある。修飾語が数量に関する場合もその一つである。

banyak murid (多くの生徒)      semua kamar (すべての部屋)

このような例外的事例をどのように解釈するのか問題であるが、『言語学大辞典』<sup>(註11)</sup>によれば、連体修飾の語順によってインドネシア語派を東西に分ける「ブランドスの線」というものがあることが指摘されている。この線によって、インドネシア東部のロティ、島・ティモール (Timor) 島・ソロール (Solor)、島・ブル (Bulu)、島・スラ (Sula) 諸島・ハルマハラ (Halmahera)、島を含む東側の言語は、語順が、修飾語十被修飾語となり、その西側の言語は、被

修飾語十修飾語となる。東側の言語の事例を示せば、

ロティ語 …… manu tolo (鳥の卵)

(鳥) (卵)

ブリ語 …… mani tolo ( )

(鳥) (卵)

同じインドネシア語派であっても両様の語順があることを知るのである。

一方、日本語の場合であるが、被修飾語十修飾語の、いわゆる「逆語序」(折口信夫による)の例もないわけではない。折口信夫によってそれを次に示す。<sup>(註12)</sup>

〔片何〕

・片岡 (カタヲカ) …… 岡の傍の一地。

・片山 (カタヤマ) …… 山の傍の一地。

〔下何〕

・下沓 (シタクツ) …… 沓の下にはく足袋のような

類。

・下簾 (シタスタレ) …… 車の正面にかけた簾の下に

垂れる布類。

その他、「梯立 (ハシタテ)」「喪仮 (モガリ)」など。また、琉球語の、

・いぬぐわあ (犬小) …… 小犬

・はしぐわあ (橋小) …… 小橋

なども同じものとみる。東北方言の「犬こ」・「橋こ」もこれに該当すると考えられる。

以上のように、オーストロネシア語族のうち、ヘスペロネシア語派にみられる語順の例外的事実、そして、日本語にみられる例外的事実（逆語序）を前にした時、単なる類型上の言語事実のみをもって比較対照することの危険性を知りうると思う。むしろ、この例外的事実こそかつての両者の親縁関係を示す痕跡であるかも知れないのである。その痕跡の事象に注目してその裏にかくされた言語事実を明らかにすることが系統論においては問題解決のためのカギの一つとなると考えられる。

#### (四)

日本語における南島語的要素、それはつまるところ日本語の系統につながるものとして考察すべきである。我々は北方説に耳を傾けながら南方説の立場をも尊重し、その南島語的要素を検討することが肝要である。

日本語における南島語的要素は、音韻・語彙等の分野において認められる。以下、小稿では音韻の分野について検討を加える。

両者の関係を論ずる時誰もが引用する言語事実として、開音節の存在がある。しかし、これは誤解を生じやすいの

で初めに注意をしておきたい。

古代日本語の音節について万葉仮名表記の文献資料等を対象として分析帰納して行けば母音終りの音節すなわち開音節であることがわかる。しかし、これをもって原始日本語も同じく開音節であったと決めてかかるのは早計であろう。オーストロネシア語族のうち、東部語派（オセアニア語派、特にポリネシア系諸言語）の諸言語は語末子音を失って開音節化しているが、西部語派（ヘスペロネシア語派）では現在でも閉音節を保っているものが多い。

南島祖語 \*inum (飲む)

〈東部語派の例〉 サモア語 inu (飲む) inumia

(飲まれる)

〈西部語派の例〉 インドネシア語 minum (飲む)

スンダ語 nginum (飲む)

南島祖語 (\*inum) は本来閉音節であったとみられるのである。すなわち、オーストロネシア語族には閉音節のものもともと存在しているのである。以上の事実から日本列島の縄文期頃に渡来したと思われるオーストロネシア語族の民の音韻構造として閉音節の存在を想定することはきわめて蓋然性の高いものと言わなければならない。

次に、比較言語学でいう音韻対応の法則が認められるか、ということである。この点についてインド・ヨーロッパ語

族にみられるような体系的な音法則は現状では未だしの感がある。それはアルタイ系諸言語との比較においても同様であり、南島語族との比較に限られたわけではない。この分野については、部分的にはあるが、日本では泉井久之助氏の業績が光っている。氏は北方説をとる立場にあるが、南島語的要素を異系の要素の一つとして認めている。氏は、「南島語共通態」(原形と考えられる)において次の音韻を推定する。

a iu o  
 m n ʔ p (mp, m) t (nt, n) l t' (nt', n') k (ʔk,  
 ʔ) d (nd, n) b (mb, m) ɣ (ʔɣ, ʔ) h i r ɣ' (ʔ' ɣ',  
 ʔ') d' (nd', n') j (ʔ' d' h ʔ') w n' k' (ʔ' k', ʔ')  
 t (nt') d (nd, n)

( ) 中は鼻音結合および代償形。「j」は、すへて、その音の fronts 蓋化をあらわす。

これ等南島語共通態の音韻を基礎として、マライ・ポリネシア語と日本語の「音韻の対応」表を作成している。その比較においては問題点も多いが、中で注目されるものにとりあげ、以下私見を加えて検討する。

◎ (MP) \*n…………… (H) n

\*nam-nam (味々)

(B) nam-nam (唇で味り、なめる) (Tg) n-

am-nam (味) (日) ナム(嘗) namu  
 「不嘗(なめ)」(推古紀二九年) 「嘗奈牟」(最勝王経音義)

なお、村山七郎氏のように、[m o] N + amV を原始日本語と考え、南島祖語として、\*tamit' (甘い) を想定する立場もある。

\*i-num (飲む)

(Tg, Ch) 'inum (B) 'inum (Ja) inum (ML)  
 ni-num. (日) ノム(飲) nomu

「能彌この後は」(万・八二二) 「喉訓乃美土」  
 「咽倭云能美等」(華嚴音義私記) 「乃牟水に」(万・四三三三)

(IN) minum, meminum (飲む) minuman (飲物)

(MI) minum, minun, (SU) nginum

既出の事例である。印は声門閉鎖音。語基は num と考えられる。上記の事例よりみれば、古代日本語の「ノム(飲) nomu」は第一音節に声門閉鎖をとまなり母音をもっていた可能性がある。ノ (no) の乙類は、泉井氏の表でも、デンブウォルフの再構でも存在しないので、後でアルタイ系言語の「o:」と交替した結果生じたものであろう。

\*~nah, ~nōh (\*ta-nōh, \*ta-nah)

(土地) 野原

(Ja, ML) tanah (D) tana (土地) 野 (B) tano  
(←\*nōh) (日)ノ、ヌ(野) no, nu,

「春の努(の)に」(万・八三七)「遠方の浅努(の)  
の雉」(皇極紀三年)「あしひぎの山越え奴(ぬ)行き」  
(万・三九七八)

(IN) tanah (土地) 平地 国 (KA) thani (土地)  
(MI) tanah

南島語族は *na-*, *nah-*, *na-*, *no-*, *ni-* の語形であらわれ  
る。日本語は、*ノ* (no) / *ヌ* (nu) がこれに対応する。  
一方 (IN) の negeri (国土) 地方、土地 / negara (国  
家) / (MI) の na-gari (国土) など *ne-*, *na-*, も同源  
か。日本語の「ナキ」(地震)「那為」【武烈前紀】、  
「ネズミ」(鼠)「彌須弥」【歌経標式】の、ナ、ネも  
もと「土地」を意味する語であったかも知れない。

◎ (MP) \**n*…………… (日) *n*

\**bunza, banza* (花)

(B, ML) *bunza* (花) (Tg) *bunza* (果実)

(Ch) *banza* (花) (日) ハナ (花) \**pana* (＜Fana＞  
*hana*)

「波那の照りいまし」(記仁徳) 「婆那は咲けども」

(孝徳紀大化五年)

(IN) *bunga* (花) *berbunga* (花が咲く)

(MI) *bungo* (花)

上記の中で、チャモロ語 (Ch) の *banza* が日本語のハナ  
(\**pana*) に一番近い形式であろう。再構形 \**banza* も同じ  
であることに注目すべきであろう。なお、頭子音 *b* ~ *p*  
の対応もみられるが、このことについては改めて後述する  
ことにする。

◎ (MP) \**p*…………… (日) \**p* (P, F), *h*

\**put'og* (臍)

(Tg) *pusod* (Ja) *pusdr* (B) *pusok* (D) *puser*

(ML) *pusat* (日) ホン (臍) \**poso*

「臍見保曾美」(神武前紀・私記丙本) 「臍臍保曾俗

云倍曾」(和名抄)

(IN) *pusat* (中央) (＜そと＞) *berpusat* (集まる)

南島語はいずれも閉音節であることに注目すべきである。  
日本語はホン (\**poso*) が本来の語形。ホンのソの甲乙は  
不明であるが、ソの子音は \**put'og* (南島語共通態) の *t*  
よりして原始日本語の時代、口蓋破擦音 [tʰ] であった  
可能性がある。なお、泉井氏は、朝鮮語の *posi* をも引用さ  
れるが、これはアルタイ系出自とみるよりオーストロネシ  
ア語族の朝鮮半島への広がりを示すものとみる方がよいと  
思われる(後述)。

◎ (MP) \**t*…………… (日) *t*

\**tonok* (尖角)

(Tg) *tinik* (尖角、尖端) (MN, Fi) *tonok-a*

(刺す、突く) (日) ツノ、ツヌ(角) *tuno*

「角豆能 獸頭上出骨也」(和名抄) 「金牙 阿志乃豆

乃」(新撰字鏡) 「菟怒(つ)の 磋破赴替之媛」(仁徳

紀三〇年)

(IN) *tanduk* (角) / *bertranduk* (角) / *bertranduk*

(角を使う、角のある) *menanduk* (角で突く) > 鼻音

代償形 > (MI) *tanduk* (角)

南島語は語末が閉音節になっている。日本語の「ツノ」

(*tono*, ノは甲類。和名抄・新撰字鏡の能・乃は乙類仮

名であり、甲乙混同している) は、もと語末 *-k* の閉音節

であった可能性がある。泉井氏の挙げる「ツヌ」は上代に

確例がないようである。存疑としておきたい。なお、村山

氏は、原始インドネシア語 \**tuŋuŋ* (角) を示して居られ

る(『日本語の語源』) が、更に吟味をしてみたい。

\**butuh* (蓋「をずる」、栓「をずる」) \**buntu* (ふさ

ぐ)

(Tg) *buto'* (蓋) (ML) *butuk* (penis) (Fi) *m*

*butu-ya* (閉じらる) (Ja, ML) *buntu* (閉じる、

ふさぐ) (日) フタ(蓋)、フサグ(塞)、フタグ

(塞)。\**puta*, \**puta-gu*, \**puta-gu*, \**pusa-gu*。

「善蓋不太」(靈異記上三・興福寺本) 「瞼目表皮也、

万奈不太」(新撰字鏡) 「蓋フタ、キヌガサ」(名義

抄) 「抑塞(於)之不多久」(新撰字鏡) 「擁権 上

布左具」(華嚴音義私記) 「関不佐久」(最勝王經音義)

(IN) *buntu* (閉じられた、塞がれた) (MI) *buntu*

南島語共通態の \**butuh*, \**buntu* も、もと同源の語では

ないかと推測される。日本語では \**puta* (フタ、蓋) が原

形で、それに *g* (*gu*) がついて動詞 *putag* (\**puta-gu*)

が成立したものであろう。フサグ (\**pusa-gu*) はそれが

転じたものと認められる。この語については南島語との間

に、\**p* ~ \**p* の子音対応もみられる。

\**utu* (愚昧な)

(Ja) *utu* (新来、しんまい) (B) \**oto* (愚な) (Tg)

*uto'* (単純な) (MLn-utu (もの言えぬ)

(日) ウツケ (*utu* 愚) *utu-* (ke)

「虚(うつ)せみの人目」(万・二九三二) 「無戸室宇

津牟呂」 「我に於止礼る人を」(仏足石歌) 「滅、劣

オトル」(名義抄)

(IN) *total* (馬鹿な、とんまな、とろろ)

ハタツク (B) ヤタガログ (Tg) の語形 (\**oto*, *uto'*)

からみて、日本語のウツ (*utu*) とオトル (劣, *otour*)

とは同源の語である可能性がある。なお、ウツケ、ウツ

||口は上代には確例がないようである。

\*wutuh (完全の)

(IN) utuh (完全の、無きずの) keutuhan (無きず、

完全な状態) mengutuhkan (完全にする)

-utuh (完全) (日) ウツ (完) utu

「全剃 宇都播伎」(神代紀上) 「内幡ウツハタ(全服の意)」(常陸風土記久慈郡)

\*wutuhの事例は泉井氏の挙例にはないものである。カイ語

ウイ語 (KA、古代ジャワ語) の語形をもって南島語共通態とした。日本語のウツ (utu) は、もと語末に声門閉鎖を伴うものであった可能性がある。

◎ (MP) \*~n (\*tの代償形) …… (日) n

\*takut (悲しむ、おそれる)

(Tg) takut (B) takut (ML) takut

(日) ナク (泣) naku

「那迦じとは」(記神代) 「さわき奈久らむ」(万・

三九六二)

(IN) takut (心配な、<sup>ナカ</sup>ウツ) menakutkan (こわが

ら<sup>カ</sup>ウツ), penakut (臆病者) (MI) takuit, (KA) n-

agata, nalgata

tの鼻音代償形nは、オーストロネシア語族では特徴的なものである。日本語のナク (naku) はその鼻音代償形

が残ったものと解釈される。「ナク」を名詞ネ(音)の交替形ナが動詞化して意味の分化を起こしたとする説もあるが、\*takutのような南島語に出自を求めるのがいいと考えられる。なお、ナク(泣)と<sup>ウツ</sup>ウツとは、南島祖語\*tanjit(泣くこと)、マライ語tanjis, mdhanjisとつながるものとする村山氏の説(『日本語の語源』)もある。更に検討の余地がある。

◎ (MP) l………… (日) r (語中)

\*bilah (切片、こけら)

(Ja, ML) bilah (ひら、切片、一片・二片の助数詞)

(D) bila (竹の片) (Ja) wilah (条板・木舞)

(日) ヒラ(片) \*pira

「薄く平らなもの」「比良端(ひらせ)にも紐とくもの

か」(万・三五五二) 「枚(ひら)の浦」(万・二七

四三)

「薄く平らなものを数える助数詞」「蜜蜂房四枚(ひら)」

(皇極紀二年) 「鹿皮一張(ひら)」(天武紀五年)

(IN) helai (助数詞へ枚) (MI) halai, alai (シ)

南島語・日本語ともに、「薄く平らなもの切片」・「助

数詞」の意義用法を共有して居り両者の関連は深いものと

考えられる。なおこの事例も、\*b~\*pの子音対応がみら

れる点注目される。

◎ (MP) \*t'..... (日) S

\*t' abah (水を張った稲田、水田、沢)

(ML, Ja) sawah (水田) (B) saba (水田)

(日) サハ(沢) \*sapa

「溪佐波爾」(靈異記上十二・興福寺本) 「泉澗訓左

波」(華嚴音義私記) 「西ノカタ平川(さは)ヲ渡テ」

(石山寺本大唐西域記長寛点) 「陂沢也……奴万、又、

佐波」(新撰字鏡・享和本)

(IN) sawah (田、水田) bersawah (田植えする)

menyawah (田を耕す) (MI) sawah (田)

\*put'og (ホン、膺)の項でみたように、頭子音\*t'に對

応する日本語のSの音価がもと「t」であったとする説

の証左ともなるであろう。古代日本語で、サハは東日本で

は溪谷、西側では沼沢を指すとのことである。<sup>(注8)</sup>この語が南

島語族に由来するとすれば、西の沼沢の方が原義ではない

だろうか。なお、話中ではあるが\*t'~\*pの子音対応を認

めることができる。

\*t'op-t'op (吸う)

(Ja) sō-sōp (Tg) sip-sip (B) sop-sop

(Ch) t'sop-t'sop (吸う) (日) スフ(吸) \*supu

「接我肩吻……倭言須布」(華嚴經音義私記) 「吸須

比」(靈異記上二八・興福寺本)

(IN) isap, mengisap (吸う、吸い込む) (SU) ny-

euseup (MI) isok (吸)

オーストロネシア語族の疊語形は形態的特徴として知ら

れている通りである。上記の単語群が象徴辞に由来すると

すれば比較言語学においては問題となるかもしれない。た

だ、借用語の可能性は十分にある。

\*t'irup (吸る)

(B) sirup (D) surup (日) シル(汁) siru

「染木が斯流に」(記神代) 「澗阿井之流 膿字美之

留 松瀦松乃之流」(和名抄) 「糟湯酒うち須須呂

比て」(万・八九二) 「吸スル」(名義抄) 「水ヲ

嚙(ススル)ヘシ」(光明院本蘇悉地羯羅經承保点)

susuru<sup>(注9)</sup> \*susuru

(IN) hirup, menghirup (吸う、すする)

泉井氏は、\*t'irupに対して日本語のシル(汁)を対応

させられるが、語義的にみてススル・ススロフの方がより

近いのではないかと思われる。ただ、ススを象徴辞とみれ

ば問題を残す。

\*t'ola, t'olan, t'elat (中間、空間、中空のところ)

(B) sola (すきまに入りこむ) solan (すきまに押

しこむ) solat (入り込む) (ML) sola (中間の空所)

selan (中間のすきま) solat (海の狭ばまるころ)

(Ja) s<sup>o</sup>dia (トキキ) (D) helan (空間) , selat,

helat (トキぬける) (日) Nora (空) 中空) sora

「蘇良は行かず」(記景行) 「蘇良を見れば」(推古紀二〇年) 「道の蘇良ちと」(万・三六九四)

(IN) celah (空間) 間隙、裂け目) , sela (二つの間の空間) 透き間 bersela (トキ間がある) (SU) sel

a-sela, sesela (空間) (KA) sela (詞) (MI) ca-lah (トキ間)

オーストロネシア語族にみられる共通の単語群、中で、カウイ語の sela に注目したい。日本語の Nora (空) はこれ等の語につながる可能性が大である。

\*t'ilak, t'ilaw (光) 輝く、反映 [する]

(Ja) sila' (光りがち) (D) silak (トキ間)

(MN, Fi) vila (輝く) (Tg, ML) silao (トキ間)

トキ 眩輝) (JA) silo (シ) (日) シロ' シラ (白)

siro, sira

「真之路の鷹」(万・四一五五) 「志羅かしが枝を」

(景行紀十七年) 「之良雲のたなびく山を」(万・四〇〇六)

〇〇六)

(IN) sinar (光) 光線) bersinar (光をばなす)

silau (トキぬける) , kesilauan (トキぬける)

(KA) dilah (光) seléh (光) (SU) silo

(まびぬ) (MI) silau (まびぬ)

以上一連の単語家族を眺めた時、日本語のシロ(口は甲類)・シラ(白)はこれ等とつながる語と考えられる。なお、枕詞「シラヌヒ」(ヒは甲類)の語義については不明であるが、「シラ」は「輝く、まぶしう」、「ヌ」は連接辞「ヒ」は「日、太陽」とみる説を支持したい。<sup>(註)</sup>

\*at'at (浅う)

(Ja) asat (浅う) (ch) a'Cit (小ちう) (PN) サ

ア語) ro-asa (浅う) (日) アサ(浅) asa

「安佐治山〔浅茅山〕」(万・三六九七) 「阿佐遅波

良〔浅茅原〕」(記顯宗)

上代日本語においてアサの仮名書き事例が少く、それに対応する南島語の語形も多くないので、両者の関係は何とも言えない。

◎ (MP) \*K……………(日) K

\*kaka (姉)

(Ja, ML) kaka' (D) kaka (Tg) kak'a

(B) haha (日) カカ(母) 嬢 (カ) kaka

「caca (カカ) または、ハワ」(日葡) 「子が母を呼ぶ

語) ,

「五郎兵衛かか、かしわもちくれる」(天正日記) 「妻をわち」

〈語源説〉ハハ(母)の転(物類称呼など)<sup>(注2)</sup>

(IN) kak, kakak (姉、兄) (KA) kaka, (MI) kak, kakak

泉井氏が疑問符をつけられるように両者の関係は明確ではない。日本語のカカ (kaka) には「姉」の意はないようである。「カカ」の事例も上代にはないようである。

\*kalah (殼、から、甲)

(Tg) kala (亀) (Ho) hara (真珠貝) (B) hara a (亀甲) (日) から (殼) kara

「冬木の素加良」(記応神) 「なづきの田の稻賀良」(記景行) 「植物の茎や幹の意」

(IN) kulit (皮、卵の殼) kerang (貝の一種) kura-kura (亀) (MI) kulit (皮) karang (貝の一種) kuro-kuro (亀) (SU) kuya (亀)

古代日本語の「カラ(殼)」の確例が今一つ明確でないようである。既出の事例は、「植物の茎や幹」の意で、「殼」の語義の中心をなしていないようである。『日本国語大辞典』は、「殼」の意として「貝の柄を取て」(観智院本三宝絵上)を初出例とし、「なきがら」の意として、「からは焰となりたしものを」(古今・物名・一一〇二)を挙げらる。

以上の状況よりみて、日本語「カラ」と南島語\*kalahと

の関係は不明といわざるを得ない。

\*kalam (暗き)

(ML) kalam (暗き) (B) holom (暗き) (Ja) kalam (水面下の) (日) クラ、クロ (暗、黒)

kura, kuro

「闇(くらけ)くら」(万・一五三九)「冥久良之」

「漢久良之」(東大寺法華義疏紙背)「以上、クラ(シ)」

「甲斐の矩盧(くろ)駒」(雄略紀十三年)「ぬばたまの久路岐御衣」(記神代)「以上、クロ(シ)」

(IN) kalam (うす暗い、不明な、はっきりしない)

(MI) kalam (暗く)

\*kalam とクラ・クロの関係について、泉井氏は同源のものと考えて居られるようである。一方、(IN) には、ge-lap (暗く) とどう語もあるもので、これとの関係もあると認められる。村山七郎氏も、\*galap (暗やみ) を引用して、これを日本語のクラ・クロと結びつけようとする。

(『日本語の語源』) 筆者も村山説を支持したい。

\*kilap, \*klat, \*kilaw (輝き)

(ML) kilap (輝き) klat (電光) kilao (反射)

(Tg) kilap (輝き) kidlat (電光) (B) hilap (電光) (日) キラ(ラ) (輝) kira-(ra)

「端正岐良支良シ」(靈異記中・三二話)「潔伎良々々

之「祥伎良々々」(最勝王経首義)「嫩嫖妍三字同、支良々々志」(新撰字鏡)「雲母(キララ)「飭窓」(遊仙窟)「雲母岐良々」(和名抄)

(IN) kilap, gilap, kilat (光る、輝へ)、mengi-lap (ピカピカ光る) kilau, berkilau, meng-ilau (キラへ、キラキラ光る) kedip, kelip (キラたぎ、またたぎ)

(MI) bakilau - kilauan (輝へ)、kiok (またたぎ)

(KA) kila (キラへ) akila, makila (キラめへ)

上記一連の単語群は語義的にも共通のものがあって密接につながっているものと思う。これ等を象徴辞とみる立場から比較の対象から外すのは早計であると考ええる。日本語の「キラ (kira) を語基とする語はオーストロネシア語族に由来するものと考えられる。

\*bak - bak (剝へ)

(Ja) baba' (皮を剝がれたる) (Tg) babbak (剝

ぐ) (PN) サマエ語) fata (皮剥ぎのタロ芋) (日)

ハク、ハグ (剝) \*paku

「波伎垂れ」(万・三八八六) 「全剝字都播伎」(神

代紀上) 「逆剝(さかはぎ)」(記神代)

(IN) babakan (樹皮、外皮、皮) bacok (切る、刺

す)

「シヤカルタ」, (MI) mamakuak (切る、刺す)

日本語の「ハク(グ)」が南島語に由来するとすれば、第二音節「ク」は、もと清音ではなかったかとする説の一証となるだろう。<sup>(註4)</sup> なお、この事例も、\*p ~ \*p の対応の一例とみることができよう。

◎ (MP) \*d..... (日) t, d

\*dakup (抱へ)

(ML) dōkap (抱へ [rɔɔ]) (Tg) dakip (保持

する) (B) dahop (抱へ [rɔɔ]) (日) ダク(抱

(mu) daku

「かき武太伎寝れど」(万・三四〇四) 「抱持上取也

牟太久」(華嚴音義私記)「抱有太加之口」(靈異記上

三〇、興福寺本) 「抱干田支」(靈異記下九)「常二

懷(ウダキタマフ、イダキテ)憤懣」(神武前紀)、

(IN) dakap, berdakap, mendakap (抱へ、抱きしめ

る)

古代日本語に「ダク」の語形はあらわれず、<sup>(註5)</sup>もと「ムダ

ク」と考えられる。南島語共通態では、\*dakupで、第一

音節にムは来ないが、接頭辞の発達した語族であり、(IN)

などの mendakap の men- に由来すると考えられる。村山

氏もそのことを指摘して居られる。(『起源』)

◎ (MP) \*b..... (日) p

この子音対応例は多く(語頭・語中いずれの場合もある)。

「れまどくくつか指摘した通りである。まごめて示せば、

\* buyra, bayra (花) —— ハナ (花) \*pama

\* butuh (ふた「をさす」, 栓「をさす」), \*duntu (ふたぐ) —— フタ (蓋) \*puta フタグ (塞ぐ) \*put agu

\* bilah (切片、こけら) —— ヒラ (枚) \*pira

t' abah (水を張った稲田、水田、沢) —— サハ (沢)

\* sapa

\* bak—bak (剝ぐ) —— ハク (剝) \*paku

他にも事例があるのでそれを次に挙げる。

\* barut, \*baroh (腫れ「る」)

(ML) barut (結び、襟飾) (B) barut (腫物)

(ML) barah (B) baro (日) ハレ、ハル (腫)

\*pare \*paru

「両乳脹波礼多留己ト」(靈異記下一六)「瘡字亦作腫、

波留」(和名抄)

(SU) bareuh (はれあがる)

「ハレ・ハル(腫)」については、上代日本語の確例にやや不安を残すが、これに対応する南島語族の単語群よりして両者の関係は深いものと思われる。なお、後述の\*bar-  
ルハル(春)の対応例は、むしろこの\*barut, \*baroh等

と結びつけるべきかもしれない。

\* barot' (限る)

(ML) batas (Ja) watas (B) batas, batos (限界、境界) (日) ハテ、ハツ、ハタース(果)

\* pate \*paru \*patasu

「明け婆天ぬ此の夜」(歌経標式)「年は極(はて)しか」(万・一八四三)「末婆随志つも」(武烈前紀)、

「果ハタシ」(最勝王経音義)

(IN) batas (境界、限界、〜まで) (KA) wat-

es (境界) (MI) batesh (SU) wates

日本語の「ハテ」は新しい語形で、上代にはみられないようである。(注)「ハタス」(\*patasu)がもとも古いか。

\* (bi-) bir (唇)

(ML) bibir (唇) (B) bibir (日) 「クチ」ヒ

ル(唇) \* (kuti) piru

「婢奈為女(中略) \*上久治比留尔黒子」(古文書三、

天平勝宝二年)「脣久知比留」(最勝王経音義)

(IN) bibir (脣、物のふち) (MI) bibia (SU)

biwir

日本語の「クチヒル」(\*kuti-piru)は、「クチ(口)」に南島語系の(bi) birより生まれた「ヒル」(\*piru)を  
下接して生まれた語と考えられる。

\* baru (新しき)

(ML) baru (新) (B) (im-) baru (新)

(Tg) hago (シ) (日) ハル (春) ? \*paru

「む月たち波留の来らば」(万・八一五) 「張し来ら

ば」(万・五二九) 「以上、春の意」

「青柳の波里て立てれば」(万・三四四三) 「春は張

つつ秋は散りけり」(万・一七〇七) 「以上、張る(芽

がふくらむ)の意」

(IN) baru, baharu (新) (KA) wahu (MI)

baru

泉井氏が疑問符を施して居られるごとく、\*baru (新し

き)に、日本語「ハル」(\*paru)を対応させるのは無理

と思われる。日本語の「ハル」は既述した南島語族の \*bar-

ut, \*barōh (腫)に由来するとみた方がよい。「芽がふく

らみ、やがて花が咲く」季節「春」のイメージを考えるこ

とができる。日本語のハルは春・張る・腫るは同源の語

と考えられる。<sup>(注8)</sup>

\*buku (ふくれ [る]、結び目、つき目)

(ML) buku (ふくれ) (Ho) buku (腫れ) (T

g) buku (蕾) (日) フクール (脹) \*puku-ru

「角(つの)の布久礼に」(万・三八二二) 「肥不久

礼天」(靈異記下・三八) 「瀧波良布久留」(新撰字

鏡)

(IN) buku (塊、指関節) (MI) buku (節)

既述の \*barut \*barōh (腫れ [る]) は腫る・張る・

春の対応によく似た対応である。

\*bukuに対応する日本語フク(\*puku)に、接続辞のラ・

レ・ロが下接して、フクラ(\*pukura)・フクレ(\*puk-

ure)・フクロ(\*pukuro)などがうまれたと考えられる。

◎ (MP) \*d'..... (H) S Z

\*gad'ah (象)

(Ja, ML) gajah (象) (B) gaja (象) (日) キ

サ (象) \*kisa (kiza)

「象(きさ)の小川」(万・三二六) 「み吉野の象山」

(万・九二四) 「象岐佐、獸名」<sup>(注8)</sup> (和名抄)

(IN) gajah (象) 将棋の駒 gading (象牙) (M

I) gajah (象) gading (象牙)

泉井氏によれば、\*gad'ah (象) はインドネシア語派に

限られ、メラネシア・ポリネシア語派にはみられないとの

ことである。もとサンスクリットの gaja-に由来したも

ので借用語。gaj-は「咆哮する」の意。日本語の「キサ

は、その借用語 \*gad'ah に基づくものであろう。なお、

「ゾウ(象)」の語形は、『色葉字類抄』の頃(12C後半)

よりあらわれるようである。

\*dinak (しなやかな)

(Ja, ML) jina' (しなやかな) (B) jinak (シ)  
 (日) シナ(ヤカ) シナ=フ(撻) \*sina-pu  
 「立ち之奈布君が姿」(万・四四一) 「志奈女久も  
 言ふなるかもよ」(琴歌譜)<sup>(注)</sup>  
 (N) jinak (おとなしい、従順な) (MI) jinak (シ)  
 \*d'inakと古代日本語の語基シナ(sina)との対応につ  
 いては何とも言えない。

(五)

以上、問題とすべき対応例をいくつか示した。泉井氏は、  
 古く朝鮮南部にも南島系の言語が行われていたとして朝鮮  
 語との対応例もいくつか示される。すなわち、

(MP) \*pu'dag (躋) ~ (朝) posi  
 (シ) \*p'orai' (米) ~ (シ) psal  
 (シ) \*gil- (まわす、うがう) ~ (シ) \*si (齒)  
 この点については村山氏が注目され、泉井氏の言説、ま  
 た、S・マーティン氏の論を参照しながら若干の比較を試  
 みて居られる。この点については論ずべきことも多いが他  
 日を期したい。

日本語の中に南島語の要素が存在することを明らかにし  
 たが、日本語はその南島語を基層言語としてうまれたもの  
 なのか、あるいはアルタイ諸語との混合言語として成立し

たのかは、にわかには断ずることはできない。十分な考究  
 を要すると思われる。

〔注〕

(1) いわゆる「アルタイ語族」という語族の設定には問題が  
 ある、という考えに従う。(村山七郎・大林太郎『日本  
 語の起源』弘文堂)

(2) 『国学院雑誌』14-8 (通巻166) 所載。

(3) (注1) 同書。

(4) (注1) 同書の記事に拠る。\*印は推定を示す。以下同  
 じ。

(5) 岡正雄「日本文化の基礎構造」(『日本民俗学大系』所  
 収、平凡社)

(6) 「好捕魚鰓、水無深淺、皆沈没取之。(中略) 男子無大  
 小、皆黥面文身。(中略) 婦人被髮屈紒、作衣如单被、  
 穿其中央、貫頭衣之。」(岩波文庫本に拠る)

(7) 『日本書紀』上、補注2-127 (日本古典文学大系67)  
 によれば、インドネシアの北のセレベス島のミナハッサ、  
 パラウ島、カンボジアの西北部等に酷似する話しが伝え  
 られている。

(8) 注(7)同書。『古事記』では、「火照命、此者隼人阿多君之  
 祖」とある。

(9) 注(1)同書。

(10) DはDierangan (説明される) の頭文字、MはMenerangan (説明する) の頭文字。

(11) 『言語学大辞典』(三省堂)「インドネシア語派」の項。

(12) 『日琉語族論』(民族学研究15―2)『折口信夫全集』

(19) 所収、中央公論社

(13) 注(11) 同書の事例に拠る。

(14) 泉井久之助「日本語と南島諸語―系譜関係か寄与の關係

か―」(民族学研究17―2)。以後、村山七郎氏・崎山

理氏等の緻密な研究がある。なお、外国では、ドイツの

デンプウォルフ (Dempwolf, O.) の研究が著名で氏は

インドネシア祖語を再構成し、これを「南島祖語」(Ur-

austronesisch) とした。それは a i u e p b t

- d d i' d' k' - g' - k g m (中略) - nk - - ng - , な

じ。

(“Vergleichende Lautlehre des austronesischen W-

ortschatzes” (3Bde.)

(15) 注(14) 泉井、同書。

(16) ( ) 内の文字は以下に示す言語の略記である。

(Mpd) マライ・ポリネシア語、(B) バタック語、(Tg)

タガログ語、(Ch) チャモロ語、(Ja) シャワ語、(ML)

マレー語、(IN) インドネシア語、(MI) ミナンカバウ

語、(SU) スンダ語、(D) ダヤク語、(KA) カウイ語

(MN) メラネシア語派、(Fi) フィジー語、(PN) ポ

リネシア語派、(HO) ホウア語、(日) 日本語、(朝)

朝鮮語。なお、引用文献も次の通り略記する。最勝王経

音義、金光明最勝王経音義、万々万葉集(漢数字は国歌

大観番号)、記、古事記、紀、日本書紀、私記、日本紀

私記、靈異記、日本国現報善惡靈異記、名義抄、類聚名

義抄、日葡、日葡辞書、古文書、正倉院文書、華厳音義

私記、新訳華厳経音義私記。

(17) 村山七郎『日本語の語源』弘文堂

(18) 原本「於」字欠。標出の漢字(抑塞)よりみて、オシフ

タグの訓が考えられるので、「於」字脱とみる。

(19) 『時代別国語大辞典上代編』(三省堂)、「なく」(泣・

鳴)の「考」による。

(20) 注(19) 同書、「さは」(沢)の「考」による。

(21) 「ススル」の例は、上代に確例がない。(注19、同書

「すする」の「考」)

(22) 注(17) 同書に同じ指摘がある。

(23) 注(19) 同書に、「かか(母・嬢)」の項なし。『日本国語大

辞典』(小学館)の「かか」の項による。

(24) 注(19) 同書、「はぐ」(剝)の項の「考」を参照。

(25) 注(19) 同書に「だく(抱)」の項なし。「むだく(抱)」

の項の「考」によれば、上代に確かな仮名書き例はいず

れもムダクである。ウダクは靈異記の訓注がもつとも古く、イダクは書紀古訓に見え、竹取物語や土佐日記など平安時代に用いられる語形。なお、『日本国語大辞典』によれば、「ダク」は『宇津保物語(国譲下)』などを早期の例として挙げる。

(26) 「ハテ(果)」(名詞形)は、上代に事例がないようである。(注19、同書にのせず。『日本国語大辞典』は、貫之集(一〇)、源氏物語(絵合)の例を挙げている。

(27) 注(19)同書、「くちひる」(唇・脣)の項の「考」になると、ヒの清濁について、名義抄は、数例中、声点をうった一例が濁音であるが、最勝王経音義は清音である。上代において濁音であった証拠はないので、しばらく清音とする、とある。南島語との関連よりすれば、ヒは明らかに清音である。

(28) 注(19)同書、「はら」(腹)の項には「人や動物の腹部」の意の他に、「壺などの器の中央のふくれたところ」として「咫(みか)のはら満ちて」(祝詞祈年祭)の例や、「瓶の類の、胴部のふくらんだ容器を数える際の助数詞」として、「古酒式腹(はら)」(古文書一、天平元年)等の例をあげている。そうだとすれば、「腹」も、腫る・張る・春などと同源ではないかとも考えられる。

(29) 「岐」字は甲類であるが、上代の仮名書き例がなく、甲・

乙兩類の区別は不明。

(30) 「シナヤカ」は上代に事例なし。『日本国語大辞典』は、『源氏物語(夢浮橋)』の「いと清げにしなやかなる童の」を早期の例としてあげる。

(31) 注(17)同書、「あとがき」参照。